

# 舞台を支える 技術者のまなざし



株式会社ジャスト 常務取締役

やま がた けん じゅ  
山形 健樹 さん

みの〜れと共に生活するスタイル  
Minole Life  
のすすめ

No.225

舞台の音響に興味を持ったのは18歳の頃でした。現在は舞台技術者としてみの〜れやアピオスのホール運営と文化芸術作品づくりを支える、株式会社ジャストの山形健樹さん（水戸市在住）にインタビューします。

## 人と文化を支え続ける

子どもの頃は体が弱く、学校帰りには看護師をしていた母親の勤務先で吸入をしてから帰宅する毎日だったそうです。そんな息子を心配した父親の勧めで、小学3年生から相撲クラブに通うようになりました。中学校では柔道部、高校ではラグビー部に所属。体づくりだけでなく、仲間と目標に向かう楽しさも学びました。

高校卒業後は音響や映像編集を学ぶため、都内の専門学校へ進学。当時はインターネットで仕事を探す時代ではなく、学校に貼り出される求人票を見ながら音響の現場のアルバイトで経験を重ねていました。

「東京に残るより地元で働こうと思ったんです」。そうして見つけたのが、株式会社

ジャストの求人でした。自ら電話をかけたことがきっかけとなり、舞台技術者としての人生が始まります。

その後、大宮町（現常陸大宮市）ロゼホールで約4年間、舞台技術管理の仕事をしました。舞台の仕込みや本番運営、利用者対応など、ホール運営の基礎をこの時期に学んだと言います。

この頃、美野里町（現小美玉市）に新しい文化ホールが建設されるとい話を耳にしました。気になって建設予定地を訪れた山形さん。「辺り一面が森で、本当にここにホールができるのかなと思いました」。ところが後に完成したみの〜れを見た瞬間、その印象は大きく変わりました。「お客さんから見ても、演じる側から見ても、本当によく考えられたホールだと思いました」。客席数を必要以上に増やさず、その分舞台空間を広く

確保する設計。どこからでも利用しやすいバリアフリーの考え方。舞台技術者の視点から見ても感心する点ばかりだったそうです。

みの〜れ誕生から24年。「つどう・つなぐ・つくる」を掲げ、住民が主役となって文化活動を育んできたみの〜れは「全国各地から視察に訪れる、お手本になるホールになりましたね」と山形さん。舞台技術者として長年多くの文化ホールに関わってきたからこそ実感です。

現在はアピオスの舞台技術管理マネージャーとして、住民の文化創造活動を支えています。「みの〜れの子どもたちが『ジャストで働きたい』と言ってくれた時に、胸を張って『おいでよ』と言える会社になりたいんです」。

舞台の裏側から人と文化を支え続ける山形さん。小美玉文化を支える大切な力となっています。